

# PREMIST

プレミスト  
2017 January  
vol. 33



テキスタイルデザインを旅する京都



## わびさびとモダンの融合 京和傘の次なるステージ

舞妓さんや芸妓さんが使うことでも知られる京和傘。着物と合わせることで一層の魅力を発揮する装飾品であり、日本特有の伝統工芸品でもある。

歴史をひも解くと、傘は平安時代に大陸から伝わったとされている。雨具として傘が使われるようになったのは、江戸時代中期以降という説が有力だ。浮世絵師、安藤広重の作品「大はしあたけの夕立」（「名所江戸百景」1857年頃）には、夕立の中で傘をすぼめて橋を渡る人々の姿が描かれている。以後、伝統文化や伝統芸能との邂逅を果たし、日本的な美意識を備えた工芸品として進化を遂げた。歌舞伎や日本舞踊、そして野点の際にも和傘は必需品である。

今回訪れた『京和傘 日吉屋』は、数少ない京和傘の製造元だ。創業は江戸後期で、2代目の頃より現在に至るまで、同じ場所ですべての工程をこなしてきた。近年は市場が縮小傾向にあるが、その渦中で奮闘しているのが、5代目の西堀耕太郎さん。ホームペー

は、和傘の技術を応用した照明の製造販売まで手掛けている。時代の先を読んだ挑戦を続け、百数十年の歴史を誇る老舗を盛り立てている。

「4代目で店を畳むことも考えていましたが、5代目が引き継いだことで日吉屋が若返りました。今では職人も20〜30代の女性を中心に、柔軟な感性を活かして傘づくりに励んでいます」

営業部の平山大輔さんは、そうやって顔をほころばせる。ものづくりが盛んな京都には、京都伝統工芸大学があり、志のある若者が伝統技術を学んでいる。日吉屋で働く若き3人のうちの2人も、同校の卒業生。残る1人は美大出身だ。

そんな職人たちが作る和傘だが、ベーシックな構造は昔と変わらない。素材に使うのは、竹と和紙の天然素材がメイン。洋傘なら骨の数は基本的に8本だが、和傘になると30〜80本と格段に多い。幾何学的な骨組みのため、開くとすっきりとした末広がりになる。

京和傘のデザインは、簡素にして趣がある。蛇の目傘を例にとれば、「中入」は円が描かれたシンプルな模様であるが、わび

さびを嗜みつつもモダンである。平山さんによると、「二つひとつの素材に個性があるので、バランスを考えて美しい傘に仕上げるのが大切です」。傘を開いた時に見える飾り糸を始め、目につきにくい所まできっちり作り込んでいる。

また、和紙を透過する光の美



しきにも注目したい。太陽に向かってかざす京和傘は天に向かって咲く花のようであり、透けて入り込むやわらかな光はささやかな贈り物のようである。雨の日はもちろん、日傘としても重宝する京和傘は、ファッションアイテムとしても大いなる可能性を秘めている。



1. 舞妓さんが愛用する蛇の目傘から「SOU・SOU」とコラボレーションした傘まで、多様な種類の京和傘を作っている
2. 真剣な表情で作業をする松本光彩さん。京都伝統工芸大学では竹工芸を専攻していた
3. 京和傘の特長の一つである飾り糸。傘を開いて見上げると、その美しさに目を奪われる

@KYOTO

AR(T)RIP

伝統と革新をつなぐ京和傘のデザイン